

子どもから「遊び」を奪うな

伊藤 隆 二

知識を「まぜごはん」、それをよそうための道具（文字・数字・計算力）を「しゃもじ」にたとえてみよう。「しゃもじ」でよそった「まぜごはん」を入れる「茶わん」は子どもの器量ということになる。

幼い子どもの「茶わん」はまだ小さいが、それは陶器のように固まってしまったものではなく、これからいくらでもひるがる粘土のような可塑性に富んだものである。しかも、それは幼少期にもっとも大きくひろがっていくという特性をもっている。

さて、子どもに知識をたくさん、しかも早くさずけたいと思う人は、じかにその子どもの小さな、しかも弱々しい「茶わん」に押しこもうとするだろう。少し気のきいた人は、じかに教えこむよりも道具をさずけるほうが先だと知って、幼児期から読み・書き・計算の学習を強いることになる。

曲りなりに、その道具（しゃもじ）を手に入れた子ども

は自分で本を読んだり、計算をしたりして、知識（まぜごはん）を自分の「茶わん」にもろうとする。しかし、その「茶わん」は小さいため、所詮、もらえる知識はたかが知れている。それでも、知識の習得をやっていない同年齢の子どもにくらべると、「もの知り」になるので、親も子ども自身も大喜びするだろう。

ここでよく考えてほしいことがある。幼い子どもの「茶わん」は小さいだけではなく、もろいため、もしむりに多量の「まぜごはん」をもろうとすると、「茶わん」そのものがこわれてしまうこともある。しかも、幼いときに押しこめられた「まぜごはん」はどうしても栄養分が薄いために、それを食べても、将来の健康づくりには、たいした役には立たない。

賢明な人なら、すぐ気がつくことだが、たくさん、しかも早く「ごはん」をもるよりも、またそのための「しゃもじ」を手に入れることよりも、「茶わん」そのものを大きく、し

かもしなやかなものにするほうが、あとで「ごはん」もたくさん入るし、またそれは食べる人にとって、将来血となり肉となるはずだ。

ところが、昨今、ご承知のとおり、「幼児教育」とか「早期教育」の名のもとで、幼い子どもたちの頭の中に、たくさん、しかも早く知識をもちこもうという傾向がいたるところにみえる。そのような教育をうけると、子どもは一見、利口になったようにみえるが、「茶わん」が小さく、弱いために、あとで破綻がくる。最近の大学生と接してみると、「スケールが小さく、ケチ臭い」という感じをうける、という大学関係者が少なくない。私なりにいいかえると、「器量が狭く、自分のソントクだけで行動する」となるのか。

断片的な知識はあるので、大学に入学することができたのだらうが、その知識はいきてこない。幼児期から小さな「茶わん」にもりこまれた知識は死蔵されていたのだらう。

幼児期には「茶わん」を大きく、かもしなやかなものにする。そのためにはまず「体力」をつける。「気力」を養う、「空想力」や「創造力」をのばす、「友愛の情」を豊かにし、そして、「主体性」をはぐくむ。それはいかにして

可能か。ズバリいえば、仲間との自由な「遊び」以外にはない。

もっとも「遊び」を手段にすることには、私ははっきり反対する。なぜなら「遊び」はそれ自体目的であるのだから。いや、もっと正確にいえば、幼い子どもは遊びたいから遊ぶのであって、それは目的ですら、ない。幼い子どもにとって「遊び」は自然な活動だというのが正しい。その「遊び」を奪いとったとき、子どもはもはや子どもではなくなる。「子ども」を奪いとられておとなになった者は、いうまでも「人」ではない。

ちなみに「人間性」を human nature という。直訳すれば「人間の自然」だ。「遊び」は自然な活動であるのに、それを奪われれば、自然破壊ということになる。幼児から「人間性」をぬきとり、器量の小さいおとなにする人は「罪人」である。

(横浜市立大学)